みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

MIYAKO TOWN DIGITAL MUSEUM
www.miyako-museum.jp

No.186

令和4年5月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL0930－33－4666
FAX0930－33－4667

博物館休館日カレンダー
2022年 5月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	1	2	3	4

□ 休館日 ※情報はR4.4.20現在

◆博物館NEWS

博物館春季企画展「刃～みやこの刀剣美展」

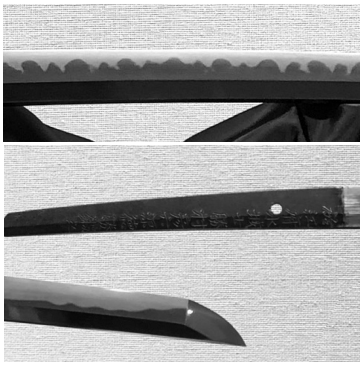
博物館では現在、企画展「刃～みやこの刀剣美展」を開催しています(15日まで)。

この企画展では、みやこ町勝山松田出身の故逸木俊司氏が当館に寄贈して下さった刀剣12本をはじめ、鍔などの刀装具を含む全ての刀剣関連資料を展示しています。居合道関係の方をはじめアニメやゲームのキャラクターに因んだ刀工の作品もみられることから、連日、町内外から若い女性や子供など様々な方にご来館いただいております。また期間中は刀や兜を飾って男児の健やかな成長を祝う「端午の節句」と重なります。多数の名刀をみやこ町で鑑賞できる、またとない機会となっておりますので、お誘いあわせの上、是非ご来館ください。

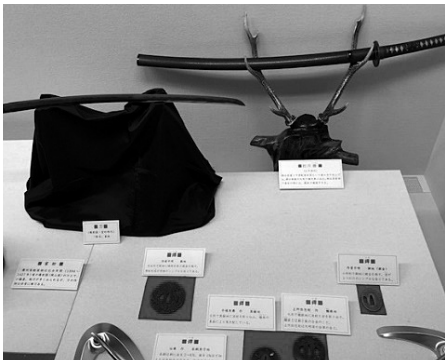
■観覧料

常設展の観覧料でご覧いただけます。(入館は16時30分まで)

▲整然と並べられた刀剣。壮観です！



▶刀の刃文(上段)と刀工の銘及び切先(下段)の近景



▶外国人に人気の鍔などの刀装具。江戸の彫金師の技術が光ります。

▶フランスからの来館。日本独自の刀剣美に興味津々の様子でした。

◆講座・教室・催し物ガイド

5月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
5月7日(土) 9時30分～

【古文書講座】
5月14日(土) 10時～

【古典かな講座】
5月21日(土) 9時30分～

【みやこ学講座】
5月28日(土) 10時～

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。

民俗芸能・行事の公開中止情報

新型コロナウイルスの感染拡大防止対応のため、例年町内各所で行われる左記の民俗芸能・行事の中止が決定しています。

三年連続で残念ですが、地域や観客の皆さんの安全を確保するための措置であり、皆さんのご理解・ご協力をお願いいたします。

●豊前神楽
(鐙畑・上伊良原・上高屋・光冨・横瀬)

●豊国楽(下伊良原)

●「生立八幡神社山笠」行事(犀川)

※紹介は5月期の指定文化財行事のみ

▲過去の実施状況(生立八幡神社山笠)

▲国内に2例しかない「木栓」。
展示・活用が期待されます。

「国内最古級のダム」のひとつとみられる勝山池田の「池田遺跡」から出土した各種木製品の保存処理が完了しました。「高級アルコール法」という特殊な技法を用いた処理法によって1000年以上前の木材を通常展示・保管することが可能になりました。この中には国内で2例しか発見されていない「木栓」も含まれており、全国的にも注目を集める資料の保存処理作業となりました。

例年、町内外から多くの見学者が訪れる豊前国府跡公園ですが、解説板の経年劣化に伴う修繕や新たな研究成果を盛り込むことを目的として公園内に設置している解説板の更新・修繕作業が完了しました。今回は復元されている「築地塀」の解説板も併せて修繕を実施。みやこ町が「大都会」であった頃の様子を楽しく学ぶことができますので是非一度ご覧ください。

▲更新された解説板。1300年前の「県庁」豊前国府跡について詳しく学ぶことができます。

みやこの歴史発見伝 147

みやこの猫ものがたり ⑤

「猫」の足跡から探るみやこの歴史
―その５―

「天災は忘れた頃にやってくる」

熊本地震から６年が経過しましたが、現在も東北地方をはじめ国内各地で地震が頻発しています。天災への心構えを如実に示した「天災は忘れた頃にやってくる」という警句は、１００年ほど前に、物理学者の「寺田寅彦」が考案したと伝えられています。寺田寅彦は高知県出身で、明治29年（１８９６）熊本の第五高等学校（熊本大学の前身校）に入学。この時、夏目漱石から英語と俳句を教わり、これ以降、終生漱石に仕え、門下生の中で最も長く漱石と関係した人物として知られています。寺田寅彦は東京帝国大学（現在の東京大学）で物理学を学び、学者として数々の業績を残すなど、漱石門下でも異色の経歴をもつ彼は、科学や西洋音楽の知識が豊かであったため、師である漱石もその知識を求めたと伝えられています。漱石を介して知り合ったみやこ町出身の小宮豊隆とは無二の親友で、博物館には二人の間で交わされた書簡が展示されています。寺田寅彦は「吾輩は猫である」で、「吾輩」を褒めた水島寒月のモデルとして知られています。しかし寺田寅彦には作中の「寒月」と唯一異なる点がありました。それは寺田寅彦は「大の猫嫌い」だったという点です。

寺田寅彦関連資料の展示コーナー
（みやこ町歴史民俗博物館）

ネズミの被害をきっかけに

寅彦の母、亀は「大の猫嫌い」であったと伝えられ、寅彦自身、猫を触ったことさえなかったとみられています。寅彦42歳の時、ネズミによって寝具が食い破られるなどの被害に悩まされた妻、紳子と子供は猫を飼いたいと訴えますが、寅彦は断固として反対します。さらにネズミの被害が深刻化した大正10年（１９２１）６月頃、近所の八百屋主人が三毛の子猫を連れてきたことをきっかけに、寅彦は猫を飼うことを事実上黙認します。こうして家族の一員となった雌猫は「三毛」と名付けられますが、子供たちから「可愛がられすぎた」ストレスによって三毛はすぐにやせ細ってしまいます。これを見かねて「玉」という虎毛の雄猫も飼うことになりました。この２匹の猫は寅彦に「何らかのかすかな光のようなもの」をもたらすようになります。

「猫嫌い」から「猫好き」へ

猫を飼いはじめて間もない頃寅彦は「しかし今眼前にこの美しい子供子供した小動物を置いて見ているうちにそんな問題は自然と消えてしまった」と述べ、２匹の猫を目の当たりにして「大の猫嫌い」から一気に「猫好き」へと変わってゆきました。猫の首をかくとゴロゴロと喉を鳴らすのをみて「この猫は肺が悪いのか？」と真剣な面持ちで述べたことを家族に笑われたり、猫が居眠りをする姿を見て、何か「大発見」をしたように周囲の人々に報告するなど、猫との毎日は寅彦にとって新たな発見の連続であり、新鮮な感動をもたらしたとみられます。また寅彦は猫それぞれに個性があることを突き止めます。その観察報告によれば、「三毛は神経が鋭敏で気難しく、わがままでぜいたく」一方の玉は、「お人好しであると同時に挙動がなんとなく無骨で素樸」とあり、まるで人間を観察するように猫が人格化されているところに物理学者の片鱗を伺うことができます。

「猫」を研究・観察した結果

「猫」を小説の主人公にした師の夏目漱石とは異なり、寺田寅彦にとって「猫」は研究対象のひとつであったとみられ、地球物理学、気象学、地震研究など優れた業績により培われた自然科学者の視点からみた猫に関する興味深い随筆が残されています。猫の尻尾観察では、「感情に応じて様々な位置形状運動を示すが、尻尾のない我々人間に、尻尾の行動について批評する資格はない。」として「猫の尻尾論」について言及しています。また「動物の斑模様の研究」では飼猫の斑模様を平面実測し、これを基に論文を執筆。イギリスの科学雑誌「ネイチャー」に斑模様の論文寄稿を試みたと伝えられています。また、妻や子供が子猫の口に指をやると噛みつき、自分（寅彦）がやると舐める行動をみて「子猫は親しみの深い相手には噛みつき、薄い相手は舐めるだけのようだ」とやや嫉妬気味の文面もみられます。

寅彦は、美しく家族の人気者だった三毛よりも大食、鈍重で人気のなかった「玉」のほうを可愛がったといわれ、玉が亡くなった朝、食事中の寅彦は家族の前でも憚らず涙を流したと伝えられています。また三毛が亡くなった際には師の漱石同様に歌を残し、その最後は「三毛がいないでさびしいな」と悲しみを表現しています。数々の「猫愛」に溢れる文章を残した寺田寅彦ですが、猫に対して思いを込めた言葉でその心境を締めくくっています。

「自分はこれまでにもう度々猫の事を書いてきた。これからまだ幾度となくそれを書くかもしれない。自分には猫の事を書くのがこの上ない慰藉（慰め、労ること）であり安全弁であり心の糧であるような気がする。」

当初は「猫嫌い」であった寺田寅彦ですが、最終的に猫に対する愛情は、漱石に「勝るとも劣らない」ものであったかもしれません。

（井上信隆）

猫の居眠り